明治学院大学

心理学部付属研究所通信

2023 March 第15号

ごあいさつ

教育と研究は大学の重要な使命です。本学の心理学部付属研究所は、相談・研究部門（心理臨床センター）と調査・研究部門の2つの部門から構成されております。調査・研究部門においては、心理学に関する諸領域の調査・研究および所員が行う研究へのサポートを行っています。相談・研究部門は、学部生・大学院生のための実習機関としての教育的役割、および、地域の皆様のための相談機関という2つの役割を担っています。加えて当研究所では、例年、専門分野に関する公開セミナーも開催しております。

本通信では、2022年度に当研究所の研究プロジェクトとして行われた研究について、概略をご紹介いたします。本年度は特別研究3件、萌芽研究4件、研究助成1件、計8件の研究プロジェクトが行われました。また、「『できない』を『できる』世界に～障がい理解を超えたインクルーシブ社会の実現に向けて～」をテーマとした公開セミナーを対面で実施いたしました。今後も、心理学を基盤として社会に対する貢献を積み重ねていくことができるよう、所員全員邁進したいと存じます。ご指導ご鞭撻を頂ければ光栄です。

心理学部付属研究所所長 **金沢 吉展**

MEIJI GAKUIN UNIVERSITY

調査・研究部門報告

心理学の学術的研究を進める拠点として調査・研究部門が2022年度行った主な活動は次の通りです。まず、専任教員を中心とするプロジェクト研究のサポートとして、特別研究プロジェクト3件・萌芽研究プロジェクト４件・研究助成プロジェクト1件を採用し、支援を行いました。また、今年度は公開セミナーを対面にて開催し、音楽や体育を考えることを通して、これからの共生社会の考え方について参加者の皆様と考えました。今後は、心理学部付属研究所年報16号の発刊を予定しております。Withコロナの世界における諸課題の解決を通して、調査・研究の一層の推進に努めていきたいと思います。

調査・研究部門主任 **辻 宏子**

特別研究プロジェクト報告

認知心理学

金城 光
（心理学科教授）
渋谷 恵（教育発達学科教授）
川端 一光（心理学科准教授）

自伝的記憶からみる日本人成人の加齢観と加齢変化への心理的適応過程に関する横断的調査研究

加齢は誰もが経験する人生の課題ですが、身体的・精神的加齢の気づきや加齢変化に対する心理的適応プロセスには法則性があるのでしょうか。日本人成人の年代や性別の違いによる加齢認知の特徴を明らかにし、加齢変化への適応過程のモデル化を目指します。今年度は、20～69歳までの2142名を対象にWeb調査を行いました。本プロジェクトでは、加齢による身体的変化と精神的変化の気づきの時期ときっかけ、および変化の受容の有無と時期について、さらに関連要因を調査し、現在分析です。今後は70、80代の高齢者に対する質問紙調査を行い、20～90歳までの幅広い年代をふまえた加齢変化の身体的、精神的適応過程を明らかにしていければと考えています。

特別支援教育学

宮﨑 眞
（教育発達学科教授）
小林 潤一郎（教育発達学科教授）
海津 亜希子（教育発達学科教授）
川渕竜也（研究員）

知的障害・発達障害者のコミュニティサポートにおける本研究所の役割に関する研究

地域に暮らす子どものおよそ10％に知的障害・発達障害が疑われ、児童期までは教育・医療・福祉の専門的支援を受けるようになったが、青年・成人後も同様に継続されるわけではなく、今日的な課題となっている。そこで、心理臨床センターの地域貢献として、①知的障害者を対象にした余暇支援プログラム、②発達障害者を対象としたコミュニティ参加プログラムを実践してきた。今回の研究テーマは、研究①で、知的障害者が余暇プログラムに参加する際に、支援者が短時間の間に障害者を理解し良好な関係を築き必要な支援を的確に提供できるためのツールである「サポートブック」の効果を客観的に検討する。研究②で、発達障害者（主に自閉スペクトラム症者）のコミュニティ参加を支援する先進事例の特色を明らかにすることである。

認知行動療法

森本 浩志
（心理学科准教授）
野村 信威（心理学科教授）

認知症の人とそのご家族のためのセルフケアプログラム ～認知症の人とその家族のこころを支える～

認知症と診断される人が増えています。認知症が進むと生活の中で不便なことが増えるため、生活の支援（介護）が必要になります。認知症の人の介護は主に家族が行っていますが、認知症という病気に起因する難しさなどから、認知症の人と家族の双方がストレスを抱えこんでしまうことがあります。このプログラムでは、認知症の人が認知症という病気と共に自分らしく生活できるように回想法をベースとしたサポートを、また家族の方が認知症と共に生きる家族と自分の双方を大切にした生活を送れるように認知行動療法をベースとしたサポートを行っています。

萌芽研究プロジェクト報告

教育心理学

垣花 真一郎
（教育発達学科准教授）
伊藤 貴昭（研究員）

教授による学習における聞き手の画像・映像提示の効果

学習した内容を説明すると、話し手自身の理解が深まる現象は「教授による学習」と呼ばれています。しかし、この方法には、聞き手が必要なので、一人で行う学習には不向きでした。そこで本研究では、この学習方法を一人で行う学習にも応用できないかを探りました。ある題材を参加者に読んでもらい、半分の群には聞き手の映像を、残りの半分の群には暗い画面を提示し、学習内容を説明してもらいました。その結果、前者の方が、事前テストから事後テストへの伸びが大きいことが分かりました。現在、両群の説明内容の違いを分析しているところです。その結果をもとに、一人でも活用できる「教授による学習」を提案していこうと考えています。

社会心理学

田中 知恵
（心理学科教授）
高林 久美子（研究員）

感情共有が受け手の両立志向態度に及ぼす影響

ジェンダーに関わりなく仕事と家事育児の両立が求められている。しかし40～50代女性を対象とした調査によれば、両立を理想のライフコースとする参加者のうちそれを実現しているのは3割に満たない（ニッセイ基礎研究所、2018）。本研究では両立を困難にしている要因として、パートナー間の感情共有を取り上げる。肯定的感情の共有は自身の両立志向態度に正の影響を与え、理想とするライフコースの実現に寄与するだろう。パートナーを持つ男女を対象に調査を実施し、両立に対するパートナーの感情推測とその共有、自身の両立志向態度、パートナーに求める態度、理想や実際のライフコース、生活満足度等について測定した（n=800）。現在得られたデータを分析中である。

算数・数学教育学

辻 宏子
（教育発達学科教授）
木村 優里（教育発達学科助教）
森田 祐介（研究員）／江草 遼平（研究員）

初等教育段階における STEAM教育実践のための人材育成に関する研究

本研究は、初等教育段階におけるSTEAM教育実践のための人材育成に対し、高等教育機関におけるプロジェクト型学習を取り入れたコースデザインについて考察・検討するとともに、具体的な実践に基づいて検証しようとするものである。初等教育段階においては、このような教育の実現が急務である一方で、その導入には多くの課題がある。例えば、これらの教育実践を進めることができる人的資源の不足はその一つである。本プロジェクトでは上記の課題に対し、これまで文献研究を進めるとともに、小学校・学童と大学との連携を通して、STEAM教育のための教材開発に取り組み成果を上げてきた。これらの研究成果は、日本科学教育学会研究会等で公開を予定している。

美術科教育学

手塚 千尋
（教育発達学科准教授）
根本 淳子（教育発達学科准教授）

教員養成系大学間交流によるアートプロジェクト型カリキュラムの開発

教員免許取得に必要な科目でカバーされる「美術教育」の思想や知識、技能は、取得をめざす校種によって異なる現状があります。そこで、各学校段階の「あいだ」をつなぐ視点や思考などの具体的な方略を学ぶことを通してアート教育の豊かさを理解することを目的としたアートプロジェクト型のカリキュラムを開発しました。北海道、香川、本学の学生たちがそれぞれの専門性を発揮しながら協働的に学ぶカリキュラムとして、①Arts-Based Researchに基づく「感覚をひらく」をテーマとしたワーク、②「展示」を理解するためのワーク、③「展示」をつくる、の3つのプログラムを展開しました。成果展「トライアングル展」は各地を巡回予定です。

会場	東京▶2022年12月15-19日 旭川▶2023年2月14-20日 高松▶2023年3月2-6日

研究助成プロジェクト報告

障害科学（心理学）

海津 亜希子
（教育発達学科教授）

多層指導モデルMIM研究と実践とのWebサイトを活用した往還的関係の構築

本研究の核となる「多層指導モデル（Multilayer Instruction Model（MIM：ミム））」は、2006年に開発されました。このモデルではLD等を含めた学習困難の子どもを通常の学級にて早期に把握し、予防的に支援を行います。本研究では、既に多層指導モデルMIMを導入したり、導入を考えている地域、学校、先生方のニーズを収集し、それらを踏まえた研究成果を教育現場に還元できるようなサイクルを作っていきます。そこでMIMに関するWebサイトを開設しました。サイト上では情報提供とともに調査を行い、MIMを実践する上での成果や課題、本サイトの有効性の検証、研究やサイトへのニーズを収集、整理し、より教育現場に有用な知見の提供へとつなげていきます。

Webサイト▶http://www.meijigakuin.ac.jp/~kaizu/mim/

相談・研究部門（心理臨床センター）

2022年度、年度当初はカウンセラー1人、アシスタントカウンセラー4人、助手、教学補佐、受付、専任教員で、相談・研究部門（心理臨床センター）の運営を開始し、11月からカウンセラーが2人となりました。面接は、カウンセラー、アシスタントカウンセラー、助手の他、相談研修員（大学院生）、相談研修員のスーパーバイザーによって行われました。コロナ感染症への対応として、オンライン面接も継続していますが、今年度は対面面接も増え、全体として、昨年度の約1.3倍のご相談がありました。今後も感染には万全の注意を払いつつ、地域の皆様のさまざまなニーズにお応えできるよう努力していきたいと思います。

相談・研究部門主任 **西園マーハ 文**

2022年度心理臨床センター利用者数

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
初回面接		6	3	4	3	2	4	2	2	4	6	1	37
継続面接	対面面接	98	95	104	112	85	89	123	106	100	92	33	1037
	オンライン面接	30	24	33	36	31	32	32	22	28	30	14	312
	電話面接	3	2	2	2	1	1	1	3	2	2	1	20
心理検査		4	2	3	3	2	3	2	4	1	3	1	28
合計		141	126	146	156	121	129	160	137	135	133	50	1434

※2023年2月7日現在

公開セミナー報告

2022年11月12日（土）
白金キャンパス アートホールにて開催

水戸 博道（教育発達学科教授 専門：音楽家教育学）

本セミナーでは、障がい者も含む「私たち」の新たな秩序の創造に向けた障がい理解について、音楽や体育の文脈を通して学ぶ機会を提供した。具体的には、障がいにおける物理的・機能的欠損を「〇〇ができない」と捉えるのではなく、むしろ障がいによって発達した機能やルールの理解を通して、「〇〇ができる」と理解できるようになることを目指し、音楽や体育の事例を紹介した。音楽では、近代以降の「音楽」という概念の広まりに着目して、「聴く」という行為の多様性に注目した。体育では、パラリンピックを事例に、「障がい者も含む全ての人のためのスポーツ（アダプテッドスポーツ）」の考え方を紹介した。そして、こうした事例から障がいを抱える人の音楽やスポーツへの参加の仕方の様々な可能性を討議した。

明治学院大学心理臨床センター

あなたのこころを支えたい

学校、対人関係、性格、子育ての悩み…
お気軽にご相談ください。

予約電話 **03-5421-5444**

受付時間 火～土曜日 午前10時～午後5時30分

ＨＰ https://psy.meijigakuin.ac.jp/clinic/
※ホームページからご相談の予約はできません。お電話のみの受付となります。